広報市民リポーターだより

第8回

エイズは怖い病気か？

広報市民リポーター

川上理佳（有浦）

▲左から岩尾保健所長、川上医師、川上リポーター

―「エイズの最大の予防は、教育である。」「エイズ感染したと思いつめて親子心中」――ニュースが流れるたびに不安でした。平和なこの街では、まるで「対岸の火事」。たまに見かける〝エイズ予防〟のポスターが申し訳なさそうに貼られているだけの気がします。

―「もし、エイズが発生したらどうするのだろう。」「ケアはどうなっているのだろう。プライバシーは守られるのだろうか。」――

健康であると信じている私たちですが、確実で日常的な知識、予防、そして受け入れ体制への信頼、確認がなくて、「もしもの時」人間的に受け取めることができるのでしょうか。

こうした不安を大館保健所の岩尾昌子所長と東台病院の川上保之先生に伺ってみました。

心配するよりまず相談

とにかく、エイズに関して心配があれば保健所に連絡してみてはいかがでしょうか。保健所にはエイズ相談窓口があり、よく話を聞いてもらえます。この段階で大半が解決してしまうケースが多いそうです（それだけエイズに対する正しい知識がないということでしょうか）。血液検査は月に一度、定期的に行っています。当日は、エイズのエの字も出さずに受けることができます。エイズ検査をした後の検査液を運ぶのにも、何回も練習を重ねたそうです。もちろん、被検査者同士、顔を合わせることがないよう十分な配慮がなされています。検査結果は数週間でわかります。

不安な人は、定期検査日までじっと待ってはいられません。そういう方には相談のうえ、協力病院を紹介します。市内の病院では都合が悪い方には、近郊（鹿角・比内）の協力病院も紹介しています。

保健所長さんから話を伺っているうちに何度も「話を聞くこと」という言葉が出てきました。保健所を訪れる人は十人十色、あらゆるケースに対しても配慮がありました。エイズに限らず健康についての話を聞いてくれます。まさに「話を聞く」保健所として存在していることを認識できました。

ノイローゼになる前に……

「病気は気から」と言いながら、精神科医も遠い存在です。しかし、エイズノイローゼなどのニュースを聞くたびに、軽い気持ちで精神科の門をたたけたら、と思うのです。地方都市ほど、精神科への偏見は強いのではないでしょうか。では、精神科医は、エイズをどのようにとらえているのでしょうか。

「エイズを特別の病として考えていない。治療は心配のもとをさぐり、無くしていくことです。自分がエイズだと思いこんでいる場合は、エイズそのものより、背景の方が問題ではないですか。」

確かにエイズかどうかは、検査をすれば解決します。それをせず悩むのは、心の悩みがそのままエイズノイローゼへと発展していくのでしょうか。エイズは、まさしく、現代の病であり、生活背景、回りの人々の関係からさまざまな問題が生まれてくるのでしょう。それだけにエイズ以前の精神科医の役割は大きいと言えます。

「備え」を活用するのは……

「エイズのケア」という点から保健所のシステム、精神科医の存在を知り、これは信頼していけるものだと確信しました。そしてさらに、「教育者との連携は？」「市民の受けとめ方は？」など疑問も出てきました。

行政、医療機関は、どうも壁が厚く、相談に行っても冷たく事務処理されてしまいそうな感があります。まずそのイメージを打破してほしい。また、私たち市民も積極的に信頼感を持ってどんどん利用したいと思うのです。エイズにしても「備えあれば憂いなし」、備えは大館には十分あるのですから、その備えを十分に把握し、活用してこそ憂いが無くなると思います。

エイズとは・・・・

エイズは日本語で「後天性免疫不全症候群」といわれ、生きていくためにどうしても必要な体の抵抗力が破壊されてしまう恐ろしい病気です。

エイズは、ウイルスによってうつるもので、このウイルスが体の中に入っても、すぐに発病するわけではありません。ふつう数ヵ月から5年くらい、ほとんど症状のない潜伏期間があります。

ウイルスが体の中に入ったかどうかは、感染後、約8週間たてば血液検査（抗体検査）で判定することができます。

エイズは、基本的には、傷ついた皮膚や粘膜にエイズウイルスを持っている人の血液や精液がつくとうつります。咳やくしゃみ、お風呂などでうつる心配はありません。

◇広報市民リポーターだよりは、毎月1日号で、6人のリポーターが独自に取材した記事を掲載しています。